The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	PTA活動経験が向社会活動への参加意向に及ぼす影響
Author(s)	中山, 満子
Citation	対人社会心理学研究. 2016, 16, p. 41-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57803
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

PTA 活動経験が向社会活動への参加意向に及ぼす影響

中山　満子(奈良女子大学文学部)

PTA 活動は子どもを持つ親のほとんどが経験する向社会活動の一種である。本研究は、ボランティアなどの援助行動から得られる援助成果が活動継続意図につながるという先行研究(妹尾・高木, 2003)を受けて、必ずしも自発的とは言えない PTA 活動においても、実際の活動から得られる効果認識と自身の得る内的報酬が活動継続意向につながるのかどうか、さらにこれらが PTA 以外の向社会的活動への参加意向にもつながるのかどうかを検討した。10 歳から 15 歳の子どもを持ち PTA 活動の経験のある母親 120 名を対象に Web 調査を行った。その結果、自分の行った活動が役にたつと感じ、自己評価と人間関係の広がりという内的報酬を得ることで、PTA 活動の継続意図につながること、またその影響は PTA 活動のみにとどまらずにボランティア活動や地域の活動にも波及しうることが示された。さらにその影響は、PTA 活動での負担を重く感じている群で特に顕著であることも示された。

キーワード：向社会活動、援助効果、内的報酬、PTA 活動、ボランティア

背景

本研究は、向社会行動を行うことで実施者自身が感じる効果や得られる内的な報酬が、さらなる向社会行動への参加意図につながる可能性について検討するものである。近年、援助行動、中でもボランティア活動が注目を集めている。ボランティア活動には居住地域での日常的継続的な活動(例えば、子どもの登下校の見守り)から災害時の支援活動など幅広い活動が含まれる。そしてこれらの活動への参加動機や理由は複雑で他人の役に立ちたいという愛他心とともにその活動への個人的関心に基づいて参加していると言われる(Clary & Orenstein, 1991)。ボランティアに代表される援助行動は向社会行動の一種であり、援助者にある程度の自己犠牲を強いる対人行動であるが、条件によっては将来の援助行動を促進するなど援助者自身にも肯定的な効果を及ぼすことが明らかとなっている。例えば妹尾・高木(2003)は、中高年のボランティア活動参加において、ボランティア活動が有効であったという効果が認識されるほど、また活動者自身への効果である援助成果(愛他精神の高揚、人間関係の広がり、人生への意欲喚起)が得られるほど、活動を継続したいと動機づけられ、活動継続につながることを示している。さらに妹尾(2008)は、若者のボランティア活動においても、援助者が上述のような援助成果を得た場合、活動継続の動機づけが強まることを示している。

妹尾(2008)は、「活動参加が自発的な意思決定によるかどうかにかかわらず、ひとたび活動に参加し、その活動を通じて自らの行動の役立ちが実感できれば、活動に満足し、以後ボランティア活動を継続することが示唆された(p.39)」と述べている。近年、学校においてボランティア活動経験と授業が関連づけられるようになっており(水上, 2003)、自発的にというよりは義務的にボランティア活動を経験するといったことは珍しくない。妹尾(2008)の研究は、このような自発的に参加するのではないボランティア活動から得る援助成果と継続動機について検討したものとされているが、その研究対象者は福祉系の専門学校生に限定されており、ボランティア活動の内容も福祉施設内の活動がほとんどで、義務的に動機づけられた向社会的活動をとらえているとはいいがたいと考えられる。

ところで、子どもをもつ保護者(実際には、ほとんどが女性保護者であることが多いが)であれば一度は経験する社会的活動としてPTA活動がある。PTA 活動は、児童生徒の教育の向上のために、学校や地域と連携を図りながら様々な活動をボランティアで行うものであり(岡田, 2015)、援助行動、ボランティア活動の一種と位置づけることができる。ただし、PTA 活動をボランティアで行うというのはある意味たてまえである。本来 PTA は任意団体であり入会の義務はないのであるが、日本では公立小中学校に子どもを通わせている保護者のほとんどが加入している(岡田, 2015)。さらに、今日においても、PTA 活動は「外で働く夫＋家事育児をする専業主婦」という保護者世帯を“スタンダード”としており、平日の昼間に会合があるなど、PTA に参加する保護者は専業主婦であることを前提として運営されていることが多い(大塚, 2015)。近年では、共働き世帯やひとり親世帯も増加して家族・家庭のあり方は多様化し、保護者の多忙化が進んでいる。そしてその多忙感から、学校行事やPTA活動への参加にも「どういう意味があるのか」と価値が見つけられなかったり(林, 2015)、参加している保護者(多くの場合母親)が「参加していない人はずるい」と感じるなど(大塚, 2015)、対人葛藤が生じる原因ともなっている。

それでは、PTA 活動はネガティブな経験でしかないのだろうか。種々の条件にも規定されるであろうが、他のボ

ランティア活動と同様に、実際にやってみることによって、「意外に面白い」活動であり、工夫次第で有意義な活動になりうる可能性も示唆される(例えば、片岡, 2014)。中山・池田(2014)の行ってきた幼稚園に子どもを通わせている母親どうしの友人関係(いわゆるママ友)に関する研究においては、ママ友間の葛藤経験が明らかになっている。その一方で、ママ友を持つことに効用を感じることも示されている(池田・中山, 2013)。子どもを幼稚園に通わせている母親にとっては、幼稚園は自分自身が関与する機会の多い場所であり、PTA 活動に参加し、そこでママ友との関係を築いていくことになる。そのような活動に参加することは、最初は気乗りのしないものであっても、ともに日々の活動を行っていくうちに、他のボランティア活動などと同様に肯定感や内的報酬の感覚を得る可能性はあると思われる。

そこで本研究では、高木と妹尾(妹尾, 2008; 妹尾・高木, 2003, 2004)のボランティア活動に関する研究を踏まえて、PTA 活動から得られる成果認識と活動継続意向との関連を検討することを第 1 の目的とする。すなわち、活動経験から得られる効果認識、内的報酬にあたる援助成果が継続意向につながるかどうかを検討する。なお、高木と妹尾は、「役に立つ」という感覚を効果認識、援助者自身が感じる成果を援助成果と呼んでいるが、本論文では両者の区別を明確にするために、以降では援助成果を「内的報酬」と呼ぶこととする。

次に本論文の第 2 の目的は、PTA 活動に参加することによって得られる効果認識と内的報酬が PTA 活動以外の向社会的活動、即ち各種のボランティア活動への参加や自治会などの地域の活動への参加動機につながるかどうかを検討することである。PTA のように参加の契機が必ずしも自発的ではない活動であっても、実際に行ってみることによって、さらなる向社会活動への参加につながる可能性について検討する。

またこれまでの援助行動やボランティア活動に関する研究では、基本的に自発的参加を前提としているために、援助者の感じる負担感にはあまり着目されていないようである。先にも述べたように、PTA 活動は保護者のほとんどが半ば義務的に加入している現状があり、活動に対して負担を感じている保護者も多いと思われる。このことから、効果認識、内的報酬といったプラス面と同時に、負担感というマイナス面の影響も考慮する必要があると考えた。そこで第3の目的として、実際の活動で感じた負担感の影響もあわせて検討する。

PTA 活動については、子どもを持つほとんどの保護者が経験することであるにも関わらず、実践的研究報告はいくつかみられるものの(例えば岡田, 2015)、心理学的な見地から検討を試みたものはないようである。その意味でも、本研究において PTA 活動を取り上げる意義があると考える。

方法

手続きと対象者

2014 年の 9 月に調査会社に委託して Web 調査を実施した。子どもが幼稚園から中学生までの間に経験した PTA 活動について回答してもらうために、調査時点で 10 歳から 15 歳の子どもを持ち、一度でも PTA 活動に参加した経験がある女性 120 名からデータを得た。平均年齢は 43.48 歳(SD = 4.7)であった。

質問紙の内容

PTA 活動について 一番最近活動に参加した時期(2009 年以前から 2014 年までのどの時期であったか)、仕事量(「とても少ない」(1 点)～「とても多い」(5 点)の 5 段階)、頻度(毎日、週に一回程度、月に一回程度、半年に一回程度、それ未満から一つを選択)について尋ねた。

負担感 活動に参加して感じた負担感について、「ない」(1 点)～「とても感じる」(5 点)の 5 段階での評定を求めた。

向社会的行動尺度 普段行う向社会行動の頻度についての回答を求めた。菊池(1988)の向社会的行動尺度(大学生版)を参考に、成人が行う向社会的行動を測る尺度 10 項目を作成した。行動の頻度を「まったくない」(1 点)から「いつもした」(5 点)の 5 段階で評定させた。質問項目は Table 1 に示す。

PTA 活動の効果認識 妹尾・高木(2003)による「社会にとって有益なものである」との定義に基づいて、PTA 活動に合致した文言に修正し、「PTA 活動をすることで学校の役に立つことができた」、「「PTA 活動をすることで子どもの役に立てた」の 2 項目を用いた。それぞれ「全くあてはまらない(1 点)から「非常によくあてはまる」(5 点)の 5 段階で評定させた。

PTA 活動から得る内的報酬 妹尾・高木(2003)の援助成果に関する尺度、及び Clary, Snyder, Stukas, Ridge, Copelland, Haugen & Miene (1998)のボランティア活動動機の機能尺度を参考に質問項目を作成した。自分自身の成長や自己への評価の高まりを示す「PTA 活動によって、自分の長所を見出すことができた」、「PTA 活動をすることで人に認められた」や、人間関係の広がりを示す「PTA 活動をすることで自分に新しい友達ができた」、「PTA 活動によって、自分がいろいろな人と付き合っていく方法が学べた」など計 18 項目について、「全くあてはまらない」(1 点)から「非常によくあてはまる」(5 点)の 5 段階で評定させた。質問項目は Table 2 に示す。

今後の活動意向 今後の向社会的活動への参加意向について尋ねた。PTA 活動では、役員など中心的に組織活動の運営を担う役割と一般の委員や単発の協力活動で

は参加動機が異なると考えられる。ボランティア活動については、継続的な活動と非常時などに単発で参加する活動で異なるだろう。同じく、自治会などの地域の活動も中心的に運営に携わる役割と行事等への協力では参加動機は異なるだろう。そこで①役員など、PTAの運営に中心的に関わる活動(以下、中心的 PTA 活動)、②役員ではなく、お手伝いや連絡係などの PTA 活動(以下、サブ的 PTA 活動)、③継続的なボランティア活動(以下、継続的ボランティア)、④災害時など単発的ボランティア活動(以下、単発的ボランティア)、⑤居住地域の町内会・自治会などの運営に中心的に関わる活動(以下、中心的地域活動)、⑥町内会・自治会などでのお手伝いや協力(以下、サブ的地域活動)の 6 種類の活動について、それぞれ「関わりたくない」(1 点)から「積極的に関わりたい」(5 点)の 5 段階で評定させた。

結果

PTA 活動について

一番最近 PTA 活動に参加した時期は、全体の 73.4%が 3 年以内(2012 年～2014 年)であった。一番最近行った活動の内容について自由記述での回答を求めたところ、行事の手伝いや連絡といったものから、広報委員などの各種委員、学級委員、本部役員に至るまで様々であった。活動頻度は半数以上(54%)が月に一回程度であり、仕事量は、半数以上(55%)が「普通」と回答していた。

尺度構成

向社会的行動傾向 向社会的行動尺度 10 項目について、1因子を仮定して探索的因子分析(主因子法)を行い、Table 1 の結果を得た。10 項目の信頼性係数はα= .87 と十分であったので、総和を向社会的行動得点とした。

効果認識 「PTA 活動をすることで学校の役に立つことができた」、「PTA 活動をすることで子どもの役に立てた」の 2 項目を合成し、平均を得点とした。

内的報酬 作成した18項目について、探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。どの因子にも負荷が高くない 2 項目を削除し、固有値 1 以上の 2 因子を得た(Table 2)。第 1 因子は、「人に認められた」、「自分自身を認めることができた」、「自分が好ましい人間であることを感じさせてくれた」などに負荷が高く、「自己評価」と命名した(9 項目、α= .96)。第 2 因子は「他の PTA 会員と楽しく活動することができた」、「積極的に学校や地域に参加できた」、「自分に新しい友達ができた」などに負荷が高く、「人間関係の広がり」と命名した(7 項目、α= .91)。

第 2 因子の寄与率が低く、2 因子の因子間相関が r = .80 と非常に高いことから、1因子構造が妥当であるとも考えられるが、妹尾・高木(2003)も示しているような、自分を高めたいという自己成長の意識と活動から得られる評価の実感を示す「自己評価」因子と、それとは異なった意味合いをもつ「人間関係の広がり」という解釈可能な2種類の内的報酬が得られたので、本研究では、この 2 因子を採用して分析を行うこととする。各因子に負荷の高い項目得点の総和を項目数で除し、得点化した。

Table 1 向社会的行動傾向の因子分析結果

質問項目	第1因子
知らない人が落として散らばった荷物を、一緒に集めてあげる	.817
友人が困っていたら声をかけて手伝う	.789
見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる	.776
落ち込んでいる友人に声をかける	.660
気分の悪くなった人の世話をする	.651
バスや列車で、立っている人に席をゆずる	.643
雨降りのとき、あまり親しくない友人でもカサに入れる	.639
友人・知人にハンカチや文具などを貸す	.557
まとめ役などの仕事や用事を引き受ける	.511
お店で、渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる	.446
寄与率	43.4%

Table 2 内的報酬の因子分析結果

質問項目	第１因子	第２因子
人に認められた	.907	-.093
自分自身を認めることができた	.904	-.028
自分が好ましい人間であることを感じさせてくれた	.892	-.070
自分の長所を見出すことができた	.874	-.024
自分が必要とされていることを実感させてくれた	.863	.041
活動をすること自体の達成感を得ることができた	.620	.261
自己を再発見し、成長させることができた	.558	.316
人に喜んでもらえた	.540	.213
自分の生活や将来に活かすことができた	.540	.312
他のPTA会員と楽しく活動することができた	-.108	.868
積極的に学校や地域に参加できた	-.043	.813
自分に新しい友達ができた	-.007	.795
自分がいろいろな人と付き合っていく方法が学べた	.023	.753
喜んだり楽しんだりすることができた	.243	.624
直接的な体験を通して、さまざまなことが学べた	.342	.504
学校の先生と親しくなることができた	.260	.479
寄与率	60.1%	5.5%

注)それぞれ文頭に「PTA 活動を行うことで」という文言が入る

負担感 負担感については「ない」「あまり感じない」があわせて 40 名(33.4%)、「感じる」「とても感じる」があわせて 61 名(50.8%)と、ばらつきのある結果となった(中点の「普通」を選択した人は19名、15.8%)。そこで後の重回帰分析では、「普通」と回答した19名を除き、負担感の高低2群を設定して行うこととする。

重回帰分析

PTA 活動から得た効果認識と内的報酬が今後の活動意向に影響を与えるかどうかを検討するために、6 種の活動への意向(中心的PTA活動、サブ的PTA活動、継続的

ボランティア活動、単発的ボランティア活動、中心的地域活動、サブ的地域活動)を目的変数、効果認識得点と内的報酬得点(自己評価、人間関係の広がり)、及び向社会的行動傾向得点を説明変数として重回帰分析(強制投入法)を行った。このとき、PTA 活動によって感じる負担感の高低によって、影響のあり方が異なる可能性が考えられたため、高負担群(61 名)と低負担群(40 名)について別々に分析を行った。さらに内的報酬得点については前述のように自己評価と人間関係の広がりという 2 つの得点間に高い相関がみられため、多重共線性を避けるために、別々に重回帰分析に投入することとした。

Table 3 から Table 8 に、6 つの目的変数別に標準偏回帰係数と決定係数を示す(これらの表では、上述のように多重共線性の影響を考慮して分析に投入していない変数の結果の箇所には、"–"を記載している)。

結果を全体的にみると、低負担群よりも高負担群において決定係数が高く、PTA 活動で負担を感じた人の方が、今回投入した向社会行動傾向、及び PTA 活動から得られる効果認識と内的報酬が、今後の活動への参加意向に、より高い予測力を持つことが示された。

次に、それぞれの結果を見ていく。今後も PTA 活動において役員などの中心的な役割で参加する意向については(Table 3)、決定係数はあまり高いとは言えないが、他の活動に比べると低負担群においても今回投入した変数が一定の影響力を持つことが示された。また低負担群と高負担群では影響する要因には明らかな差異が見られ、低負担群では個人特性である向社会的行動傾向のみが影響するのに対して、高負担群では効果認識、内的報酬の影響が大きい。特に、内的報酬(人間関係の広がり)を投入した場合には、この影響が非常に大きくなることが示された。

一方、PTA 活動でもお手伝いなどのサブ的な活動への参加意向では(Table 4)、負担感の高低による差が顕著であり、低負担群では今回投入した変数が予測力をほとんど持たないのに対して、高負担群では大きな予測力を示した。中心的な活動への参加意向同様に、高負担群では効果認識、内的報酬の影響がみられ、特に、内的報酬(人間関係の広がり)が高い場合には、参加意向に強くつながることが明らかとなった。

Table 3 中心的 PTA 活動への参加意向を目的変数とした重回帰分析

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.461 **	.387 *	−.031	−.073
効果認識	−.037	−.016	.344 *	.176
内的報酬(自己評価)	.210	–	.336 *	–
内的報酬(人間関係の広がり)	–	.214	–	.523 **
調整済み R^2	.218 **	.213 **	.348 **	.399 **

**p < .01, *p < .05

Table 4 サブ的 PTA 活動への参加意向を目的変数とした重回帰分析

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.366 *	.309 †	−.005	−.052
効果認識	.355 †	.193	.415 **	.157
内的報酬(自己評価)	−.257	–	.317 *	–
内的報酬(人間関係の広がり)	–	.054	–	.623 **
調整済み R^2	.148 *	.101	.419 **	.525 **

**p < .01, *p < .05, †p < .10

次に、PTA 活動参加が PTA 以外の援助活動への参加意向に影響を及ぼすかどうかを見ていく。まずボランティア活動については、高負担群において継続的な活動への意向には内的報酬が予測力を持つことが示された(Table 5)。つまり高負担群においては、自己評価が高まり、人間関係の広がりを感じた場合に、継続的なボランティア活動に参加しようという意向につながるということである。一方、単発的なボランティア参加に対しては、内的報酬がある程度の影響を持つが、全体としては今回投入した変数の予測力はあまり強くなかった(Table 6)。

Table 5 継続的ボランティア活動への参加意向を目的変数とした重回帰分析

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.350 *	.449 *	.054	−.004
効果認識	.192	.218	.194	.045
内的報酬(自己評価)	−.154	–	.522 **	–
内的報酬(人間関係の広がり)	–	−.254	–	.664 **
調整済み R^2	.071	.093	.431 **	.461 **

**p < .01, *p < .05

Table 6 単発的ボランティア活動への参加意向を目的変数とした重回帰分析

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.265	.375 *	.194	.146
効果認識	.306	.293	−.024	−.168
内的報酬(自己評価)	−.271	–	.416 *	–
内的報酬(人間関係の広がり)	–	−.307	–	.562 **
調整済み R^2	.062	.065	.171 **	.205 **

**p < .01, *p < .05

また自治会などの地域の活動に対しては、あまり決定係数は高くはなかったが、中心的な活動では、高負担群において内的報酬(人間関係の広がり)を投入した場合に影響が見られた(Table 7)。サブ的な地域の活動では、高負担群において PTA 活動における効果認識、すなわち「役に立った」という認識がプラスの影響を持つことが示された(Table 8)。

Table 7 中心的地域活動への参加意向を目的変数とした重回帰分析

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.343 *	.257	.103	.069
効果認識	−.072	−.043	.171	.031
内的報酬(自己評価)	.257	−	.266	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	.254	−	.423 **
調整済みR^2	.127 *	.117 †	.142 **	.177 **

**p <.01, *p <.05, †p <.10

Table 8 サブ的地域活動への参加意向を目的変数とした重回帰分析

	低負担群		高負担群	
向社会行動	.309 †	.313	.132	.107
効果認識	.180	.149	.340 *	.299 †
内的報酬(自己評価)	−.082	−	.242	−
内的報酬(人間関係の広がり)	−	−.031	−	.272
調整済みR^2	.044	.040	.292 **	.289 **

**p <.01, *p <.05, †p <.10

考察

本研究の目的は、PTA 活動への参加から得られる効果認識と内的報酬が、その後の PTA 活動参加へつながるかどうか、またその効果が PTA 活動にとどまらず、ボランティア活動や地域の活動などの他の向社会的活動の参加意向にも波及しうるかどうかを検討することであった。調査の結果、普段どれくらい向社会行動を行うかという向社会行動傾向よりも、実際の自分の活動が役立ったと感じる効果認識や、自分自身に何らかの成果(内的報酬)が得られたと感じることの方が、さらなる向社会的活動参加への意向にプラスの影響を与えることが示された。

一方、この影響のあり方には、PTA 活動で感じた負担感の高低によって明確な差異があることも示された。概して今回投入した変数が予測力を持つのは、負担が大きいと感じている群であった。すなわち、実際の PTA 活動で大きな負担を感じつつも、そこから役に立った感覚や自分自身に何らかの得るものがあったときに、もう一度 PTA 活動を行おうとする動機に結びつくことが示された。さらに、このような効果認識や自分が得たと感じる内的報酬が、PTA 活動のみならず継続的なボランティア活動への参加や自治会・町内会への協力にもつながりうることが示された。

自分自身が活動から得る内的報酬として、本研究では「人から認められる」、「自分の長所を見つけられる」、「必要とされることが実感できる」などの「自己評価の高揚」という側面と、「他の会員と楽しく活動できる」、「新しい友人ができる」、「いろいろな人とつきあえる」などの「人間関係の広がり」という側面の2種類から検討した。特に高負担群においては、「人間関係の広がり」という内的報酬を得たときに、PTA 活動やボランティア活動、さらには自治会などの活動への参加意向につながることが示された。すなわち他者と関わりながら活動を行い、関係性からの満足や喜びを認識できるときに、向社会活動におけるプラスの循環が生まれることが示唆された。

まとめると、PTA 活動においても、高木と妹尾の一連の研究が示してきたように、活動の効果を認識し、自分自身への成果を得ることで活動の継続意図につながるという好循環(妹尾・高木, 2011)が生まれうることが示された。さらに本研究では、その効果が PTA 活動のみにとどまらずに他の向社会的活動にも波及しうることが示された。

最後に本研究の課題と今後の展望について述べる。まず内的報酬であるが、結果でも述べたように今回作成した尺度から得た「自己評価」、「人間関係の広がり」という2つの得点は非常に相関が高く、1 因子と考えた方が妥当であったかもしれないが、解釈可能性から異なる意味を持つ 2 因子を採用した。重回帰分析においても別々に分析に投入したために十分に影響力を測定することは出来なかった。2 つの成果の意味合いは異なると思われるので、今後、それぞれを独立に測定可能な尺度を検討する必要があると思われる。また本研究では対象者が 120 名であり十分とは言えなかった。今後、さらにサンプル数を増やし、本研究の結果を検証していく必要があると思われる。

引用文献

Clary, E. G., & Orenstein, L. (1991). The amount and effectiveness of help: The relationship of motives and abilities to helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin, 17,* 58-64.

Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R D., Copeland, J., Stukas, A. A., Haugen, J., & Miene, P. (1998). Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach, *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 1516-1530.

林 哲司 (2015). 忙しい保護者とよりよい連携を図るために 教職研修, *511*, 20-22.

池田 曜子・中山 満子 (2010).ママ友関係のとらえ方と関係維持:面接調査による検討 日本発達心理学会第 21 回大会論文集, 151.

片岡 洋子 (2014). どうせやるなら面白いことを 教育, *826*, 13-18.

菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する —向社会的行動の心理とスキル— 川島書店

水上 哲男 (2003). 地域社会とボランティア活動:社会財の活用と互恵制の展開 佐々木正道(編)大学生とボランティアに関する実証的研究 (pp.3-21) ミネルヴァ書房

中山 満子・池田 曜子 (2014). ママ友関係における対人葛藤経験とパーソナリティ特性との関連性 パーソナリティ研究, *22*, 285-288.

岡田 芳廣 (2015). PTA 人材による地域の絆とコミュニティの形成 早稲田大学大学院教職研究科紀要, *7*, 37-46

大塚 玲子 (2015). 保護者の負担を抑えた、新しい PTA の試み 教職研修, 3 月号, 23-25.

妹尾 香織 (2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部研究紀要, *16*, 35-42.

妹尾 香織・高木 修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に

与える効果:地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究, *18*, 106-118.
妹尾 香織・高木 修 (2004). 高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連 心理学研究, *75*, 428-434.
妹尾 香織・高木 修 (2011). 援助・被援助行動の好循環を規定する要因:援助成果志向性が果たす機能の検討 関西大学社会学部紀要, *42*, 117-130.

註

本研究は科学研究費基盤研究(C)24530787(代表者: 中山満子)により行われた。また研究の構想、尺度の作成については筆者の指導のもと奈良女子大学文学部渕ひとみさんと共同で行い、データの一部は平成 26 年度卒業論文として奈良女子大学に提出された。記して感謝します。

The effect of PTA activities on the intention to participate in further helping behavior

Michiko NAKAYAMA (*Faculty of Letters, Nara Women's University*)

PTA activity is a kind of prosocial behavior that almost all of parents rearing children experience. The present study examined PTA activities in line with Senoo & Takagi (2003) in which helper obtained the helping effects through the activities such as volunteering and the helping effect determined helpers' motivation of continuing their activities. Research question is whether their finding is applied to PTA activity which is not necessarily executed voluntarily. Furthermore, it was tested that helping effects obtained in PTA activity affected other prosocial behavior such as volunteering or activities in neighborhood association. Web survey was administered for 120 middle-aged women who had children and have experienced PTA activities. The main results were as follows: (1) Perceived effect of PTA activity and obtained internal reward, i.e., elevation of self-evaluation and establishment of new relationship, positively influenced the intention to continue PTA activity, (2) this was applied to other prosocial activities, (3) these effects were obtained clearer in groups who felt burdens heavily in PTA activity.

Key words: prosocial behavior, helping effect, internal reward, PTA activity, volunteer.